

スイス国指導派遣を終えて

大城戸 功

昨年、スイス剣道連盟よりアメリカ・サンタクララで開催される第十一回世界剣道選手権大会に出場するスイスナショナルチームの強化コーチとしての派遣要請を受け、二月二十三日から四月一日までの約四十日間、渡欧滞在することとなった。

二十三日早朝、松山空港を出発し約十八時間を要して同日午後六時(時差は八時間)にチューリッヒのクローテン空港に到着。チームの監督である伊藤隆治先生の出迎えをうけ空港より高速で約一時間半、スイスの首都「ベルン」に到着。「ベルン」はスイスの中央に位置し、地理だけでなく政治の中心地でもある。豊かな緑に囲まれ、中世のたたずまいが残る街。旧市街地はユネスコの世界文化遺産に登録されている。重厚な石畳の道路の両側に連なるアーケード街は「シュピタル通り」と呼ばれ、天候を気にすることなく散策やショッピングを楽しめる。また街のあちこちに設けられた噴水や騎士の銅像も、歴史を感じさせる光景であった。

翌日、三泊四日の日程で選手たちと強化合宿を行なう「スミスバルド」というベルン郊外の体育館に向かう。練習場や宿泊設備など申し分のないりっぱな体育館であったが、床は板ではなくソフトトラバーが張ってあった。現在スイスの剣道人口は約千名。強化合宿には代表選手を含む約百名が参加する大規模の合宿となった。スイスの人達の剣道は、基本に忠実で、素振り、切り返し、打ち込みは大変上手であった。しかし、技の数、打突の機会、間合いの取り方などがまだまだで、

技の稽古や地稽古が不足している感じを受けた。

合宿では私が不足に感じている事を中心に、早朝、午前、午後の一日三回の練習メニューで、みっちり稽古を行なった。かなりハードであったとは思いますが、彼らは驚くほど熱心に取り組んでくれた。

指導の上で言葉の壁が心配されたが、剣道をよく理解している伊藤先生の通訳により細かいニュアンスまで伝えてもらう事ができたのでたいへん助かった。(なお、伊藤先生は私が帰国後、日本に向いて五月の京都審査で六段に合格されたことを付け加えておく。)

言葉といえば、この国はドイツ語(スイス人の七割が話す)、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語と住む地域によつて言葉が違ふとのこと。伊藤先生が日本語をドイツ語に通訳、それをまたフランス語に同時通訳しているのには驚かされた。

合宿を終えた後の私の仕事は「バーゼル」というドイツとフランスの国境に接する都市を拠点に、代表選手の所属する各地の剣道会を三週間かけて巡回指導するという日程であった。

「トーマスです。よろしくお願いします。」と日本語で挨拶をしてくれた人は、滞在中、私の身の回りの世話をしてくれる剣道二段の青年であった。合宿所から約2時間高速を走り、彼の住むバーゼルに到着。「トーマス家」はライン川のほとりにあるマンションの五階。その一室が私の居住区である。スイスで三十四歳の独身男性と同居生活がはじまった。

「トーマス」は私の食事の世話、各剣道会

までの案内と稽古、そして自分の仕事と、大変忙しい思いをしたと思うが、なにひとついやな顔もしないでお世話をしてくれた。毎朝「オハヨウコザイマス。オゲンキデスカ。」と独特の言いまわしで挨拶をしてくれる。彼の「ニホンゴ、スコシダイジョウブデス」が海外生活における私の不安を解消してくれた。

まず、二週間をかけて、スイスの北部に位置する「チューリッヒ」「バーゼル」と東北部のボーデン湖周辺の「アラウ」そして前述の首都「ベルン」の四つの都市にある八カ所の剣道会に巡回し、代表選手達と併に指導と稽古を行なった。

この中でバーゼルにある「錬心道場」がスイス剣道の発祥の地とされている。国際剣道連盟の会長をされていた笠原氏が指導にあつていたとのこと。道場の命名は全日本剣道連盟の会長を勤められた木村篤太郎氏である。

館長の「デッドウィラー」先生は七十八歳稽古もお願ひしたが豊饒とされていた。ビールを酌み交わしながらの剣道談議は、館長の剣道に対する情熱がひしひしと伝わってきた。胸に熱いものがこみ上げてくる感じがした。道場の壁には、ここに訪れた日本の剣道家達のサインや写真が貼ってある。その中に「一九八五年小笠原宏実」の文字を見た。

三週間目に入り、今度は居住区をレマン湖北側の都市ローザンヌに移し、スイス南部地域の巡回である。ローザンヌは国際オリンピック委員会の本部が設置されていることで知られている。オリンピックミュージアムがあり古代ギリシャ時代の古代オリンピッククはもちろんのこと、近代オリンピックの第一

回から昨年開催のシドニー大会に至るまでのオリンピックに関する資料が一堂に展示されている。

ここでの一週間は、「ローザンヌ武道館」とローザンヌに隣接する国際都市ジュネーブの「春道館」で代表選手達の指導と稽古のほか、ローザンヌのバレエの専門学校「ルダ・ベジャード」に四日間学生達の剣道の授業を受け持つ日程であった。

学校の創設者「モリス・ベジャード」氏は、なんでもその世界では、鬼才と呼ばれている先生らしく、氏の持っている劇団は世界的にも有名で、世界各国からスターを目指す人々が集まってくるという。入学試験もかなり高いハードルで誰でも入れるということではないという。

十年前ぐらいに知り合いからチケットをたまたま戴き、「劇団・四季」のミュージカルを一度だけ見に行った程度の私の知識では、其の名を知らないのはあたりまえであるが、スイスから帰国してテレビ等でベジャード氏の名前を何度も見聞きし、改めて偉大さを知った次第である。

ベジャード氏は、ひとことと言えば「踊りも剣道も 心」という点で共通するところがある」ということで学校のレッスンの中に剣道を取り入れているのだという。

剣道と異なる文化の世界で鬼才・天才と呼ばれ、剣道は心だと言う外国人の先生に是非ともお目にかかりたかったが、世界中を飛びまわっている方らしく残念ながら滞在中その機会はなかった。

授業内容は音楽・踊り・楽器・リズムなど。その中に週三回一時間半の割当てで剣道が組み込まれている。他のレッスンを見学させ

てもらったが非常に厳しくさすがプロという感じがした。日本からも一人女性が入学して話を聞いたが、言葉を感じる事も大変で遊ぶ暇などまったくなく、辛い事ばかりだと言った。しかし、自分の夢に向かって一生懸命努力をしているからだろう、彼女だけではなく学生達はみんな輝いて見えた。

ダンサーを目指す世界各国の若者と剣を交えるという貴重な体験をし、また、夢を持つ事の大切さを教えられた一週間であった。アメリカへ

スイス各地の巡回指導と代表選手の強化練習を終了し、三月二十日選手団と共にアメリカに向かう。バーゼルユーロ空港を午前六時発、オランダ・アムステルダム空港を乗り継ぎアメリカ・サンフランシスコ空港に着。飛行機はもうたくさんだと思えるくらい長時間をかけて世界大会の会場地であるサンタクララにやっとたどり着いたのは現地時間午後二時であった。

「アメリカは広い」が第一印象。いよいよ広い広いアメリカで第十一回の世界剣道選手権大会が始まる。二十三日の開催日まで選手たちと調整の練習のほか、各国選手との合同稽古会、監督会議、抽選会とあわただし日々を送り、瞬く間に大会日を迎えた。

大会初日は女子の個人戦と団体戦。本大会では女子団体戦は公開競技であるが次回からは公式戦となる。スイスは個人戦のみのエントリーである。期待の「ダニエラ」選手は昨年まで国際武道大に留学をしていた学生である。健闘よくベスト十六まで進出し、優勝した日本の河野選手に敗れたものの好成績を残し男子選手に弾みをつけてくれた。

大会二日目。男子個人戦。我がスイスは男子五名出場。うち予選リーグを突破したのは二人。その二人も決勝トーナメント一回戦で敗退した。しかし、彼らの現在の力量を十分に発揮した試合内容で次の団体戦に期待が持てた。個人優勝は日本の栄花直輝選手。一回戦から日本剣道の真髄を十二分に披露してくれたすばらしい戦いぶりであった。

大会三日目団体戦。我がチームは予選トーナメントの組合せにも恵まれ、マカオ、オーストリアを無難に下し決勝トーナメントへ進出。トーナメント一回戦でロシアと対決。接戦で大将戦まで纏れ込んだが、大将「アンドレアス」が踏ん張り、スイスとしては世界大会初のベストエイトに駒を進めた。準決勝進出をかけた日本と対戦。選手たちが最も希望していた対戦相手である。結果は五対〇であったが内容は良く、選手たちも負けず悔いなしの心境で晴れ晴れとした顔をしていた。

優勝はもちろん日本。予想どおり韓国との決勝戦となったが日本の大将高橋選手の活躍で王座を死守した。今大会、特に目を引いたのは地元アメリカであった。開催国のチームであるだけに勿論、強化をしっかりと行ない大会に臨んだとは思いますが、私の予想以上の活躍で準々決勝において韓国を「あわや」というところまで追い詰めた力は本物であった。その他ドイツ、フランス、イタリアなどのヨーロッパ勢もレベルアップしていて、日本、韓国の二強時代は終わりがつつある感じがした。今後、世界大会は益々盛り上がることだろう。

閉会式。優秀選手八名の中にスイス先鋒の「ヤニス」が選ばれる。アナウンスされると

身長二メートル近い大男が飛びあがって喜びを表現する。いかにも外国人らしいパフオーマンズだ。表彰式後、次鋒の「クリスチャン」が私のところへ質問にきた。彼は日本戦での各選手の対戦時間のメモを持っていて「ヤニスは二十七秒で負けた。俺は四十八秒も戦った。他の選手も一分以上戦っている。チームの中で一番早く負けたのが彼なのになぜ優秀選手なのか」と言っているのである。伊藤監督と顔を見合わせて大笑いをした。「日本戦まで彼は全勝だったので評価されたのだろ」という説明はしておいたが、彼らは日本との戦いを「何分もつか」といった感覚でとらえていたのかと思うと何かすごく可愛らしい感じがした。世界から目標とされ、また憧れとされている日本の剣道。これからもそうあり続ける為に、日本は今以上頑張らなければ、そんな思いがした一幕であった。

大会終了後さよならパーティに出席。各人達は試合からの開放感もあり、和気藹々。歌あり踊りありの楽しいパーティとなり国際交流を深める。私もチームが好成績であったし、日本の選手や先生達とも会うことができたので久々に痛飲した。

翌日、また長い長いフライトの末二十八日夜スイスへ到着。空港でトーマスの出迎えを受ける。一週間アメリカに滞在していただけなのに何故かトーマスが懐かしく思えた。トーマスはインターネットで試合の情報を逐次入手していたとこのことで「すごい。すごい。」の連発で選手たちの健闘を称えた。残り二日間、トーマスがガイド役でスイスを観光。自然の美しさを堪能し、有名なマツタールホルンも見せてもって感動感激の連続であった。最後の夜は選手たちとさよならパー

ティ。四十日間の思い出を語り合った。「一期一会」という言葉の重さを感じた一夜であった。

三十一日午後二時スイスを後にし日本へ向かう。四月一日午前九時関西空港着。長いようで短かったスイス派遣を終えた。関西空港で食べたうどんの味は格別であった。

剣道のおかげで貴重な体験を得る事ができた四十日間であった。月並みではあるが、この体験から得たものを今後の私の剣道人生に大いに生かしていきたいと考えている。

最後に、派遣に際し、澤近会長をはじめ県剣道連盟の先生方また松風館の仲間達には多大なるご支援を戴きましたこと、紙面をお借りして心より厚く御礼を申し上げ、筆を置きます。合掌。